

Title	超越論的現象学と世代発生的現象学
Author(s)	前田, 直哉
Citation	メタフュシカ. 2004, 35(2), p. 137-144
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12400
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

超越論的現象学と世代発生的現象学

前田直哉

超越論的哲学は端的に言えば「所謂『基礎づけ主義』の代表であり、しかも近代において『第一哲学』は形而上学ではなく認識を基礎づけることであったから、言わば『超越論的転回』による『基礎づけ主義』は近代哲学の王道であった」¹。里見軍之先生は本誌第 28 号に収められた「超越論的哲学の可能性——カント哲学の位置づけ」の中でこのように述べ、「近代哲学の王道」の中でカントの超越論的観念論が占める本来的位置を、フッサールの超越論的現象学およびアーペルの超越論的遂行論との比較検討を通して論究されておられる。これとともに第二の問題として、いかにも「古色蒼然」とした響きをもった「超越論的哲学」の「基礎づけ主義」が、相対主義的風潮の濃厚な現代にあって、いまなお「サヴァイヴァル」可能であるか否かが吟味されている²。その中で、超越論的哲学が追求する「基礎」とは、最終的にそれ以上遡り問うことのできないもの、すなわち「背後遡行不可能なもの」のことであるとの解釈が示される。この場合「背後遡行不可能性」とは、およそ何らかの主義主張が展開される際、その実質的な主張内容がいかなるものであろうと不可避的に前提せざるを得ない諸条件、つまり懐疑論であれいわゆる「反基礎づけ主義」であれ、何某かの主義掲げる以上は暗黙のうちに服従せねばならないような諸前提を意味している。従って、おのれの知について自己言及的に問い返しつつ「背後遡行不可能なもの」を露呈しようとする超越論的基礎づけの企図は、いわゆる相対主義でさえ、その上に立脚せねば自己の主張そのものを維持し得ない諸条件を発見する限りにおいてサヴァイヴァル可能ではないか。このような見解が示されていると筆者は理解している。

さて、こうした「基礎づけ主義」としての「超越論的哲学」に対して、アンソニー・スタイ

¹ 里見軍之「超越論的哲学の可能性——カント哲学の位置づけ——」、『メタフシカ』第 28 号、1997 年 12 月、117 頁。

² 同上、118 頁。

ンボックがその著作『Home and Beyond』³の中で試みた「超越論的」現象学の「非-基礎づけ主義」的な展開は注目に値する。この企図を果たすため、彼は主に遺稿として残された膨大な草稿群を批判的に吟味し、晩年のフッサールがいまだ確たる自覚を伴わぬまま発見し開拓しつつあった「世代性(Generativität)」という「現象学の或る新奇な次元」(HB,3)を積極的に切り開き、この次元に適合する特有の方法として、新たに「世代発生的現象学」と呼ばれる方法を提唱している。本稿の課題は、フッサールによって創始された超越論的現象学をその「デカルト主義」との連関で捉え、スタインボックによる世代発生的現象学の試みを紹介しつつ、「超越論的」な「基礎づけ主義」について再検討することにある。

一 フッサールの超越論的現象学

1900年公開の『論理学研究』によって「現象学」は創始されたが、それは現象学的探求への「突破口」として、あくまでもその「端緒」をなすものに過ぎなかった。「事象そのもの」に即した更なる分析の中で、現象学はいわゆる「超越論的転回」を遂げ、公にされた著作としては『イデー・I』に至って初めて「超越論的」と形容されることになった。この用語が現在一般に理解されている、かの特有の哲学態度を意味するようになったのは、言うまでもなくカントの有名な定義によってである。しかし、しばしば指摘されるように、フッサールの超越論的転回においてカント哲学が実質的に果たした役割はそれほど重大なものではなかったようである。なるほど現象学とカントの超越論的哲学との「本質的な親近性 Wesensverwandtschaft」はフッサール自身が認めるところであり、「超越論的」という「カント的用語」を「継承」した旨を述べてはいる。しかしそれは現象学的分析にとって「カントの根本前提、指導的問題、諸方法は遠くかけ離れているにもかかわらず」(VII,230)行われた、留保付きの用語「継承」であったというのが実状であると考えられる。

むしろ現象学の超越論的転回は「動機」の面から見ても、またそれを実現する「方法」的観点からしても、やはりデカルト思想の直接的な影響下で引き起こされたと見るのが妥当であろう。方法に関しては周知のように『イデー・I』では世界の可疑性とエゴ・コギトの不可疑性に依拠したデカルト的還元論が展開される。ただし「現象学的エポケー」は、疑わしきを否定する方法的懐疑とは異なり、世界に対する存在確信としての「一般定立(Generalthesis)」を「作用の外に置く」という仕方で一時停止させ、世界全体を廃棄することなく一挙に「括弧の中に置き入れる(einklamern)」方法として定式化されている。そしてエポケーを蒙ることなく残り続ける「現象学的残余(das phänomenologische Residuum)」(III/1,66)を、「世界無化」によってもなお残る「絶対的意識」として析出するための諸考察が、デカルト的還元論の中核をなす。これによって意識は世界の存在如何に関わりなく存在し得る「絶対的存在」として、他方、事物世界

³ Anthony J. Steinbock, *Home and Beyond: Generative Phenomenology after Husserl*, Northwestern University Press, Evanston, 1995. この著作からの引用はHBと略記し頁数とともに本文中に記す。

は意識に依拠した「相対的存在」として明らかにされる。この絶対的な「純粹意識」が諸々の「超越」を「意味の統一」として志向的に「構成」するが故、それは「超越論的意識」と呼ばれ、その構成的諸問題の全幅に渡る解明こそが超越論的現象学の「事象そのもの」に即した研究主題と定められたのであった。

この還元論では、デカルトとの相違を特徴付ける「括弧入れ」の方法が「世界無化」の想定に至ってその本来的意義を不明瞭なものとし、これが『イデー・I』以後のさらなる方法論的反省を促す一要因となった。その後「現象学的心理学」や「生活世界」を経由する道程など「超越論的意識」の無限の広がりやを十分に汲み尽くし得る還元の方途が案出されたが、超越論的転回を遂げた当初の段階では、やはり「厳密な学的哲学」がその上に拠って立つべき絶対確実な「基礎」をまずもって領域的に確保するという志向、「動機」が強く働いていたと推察される。

この「厳密学」の樹立という目的意識もまた、当然デカルトから受け継がれたものであった。フッサールはデカルトに由来する学問的「動機」を「超越論的」という用語に結び付け、次のように述べている。「私自身は『超越論的』という言葉をもっと広い意味で、デカルトによって近代哲学全体において意味あるものとなり、そこにおいて言わば自己自身に還帰し、真正でかつ純粹な課題形態と体系的成果を獲得しようとする…原的な動機(originale Motiv)に対して用いる」(VI,100)と。「究極的な基礎づけに基づく学」(V,139)の樹立というデカルト的「動機」は彼にあって「超越論的」現象学の哲学態度を根本において規定するものであった。

本節では、フッサールの「超越論的転回」は動機と方法の両面において、あるいは双方が一体化した仕方で「デカルト的」に遂行されたことを再確認したが、こうした超越論的エゴへの還元、およびそれに基づく認識論的基礎づけという彼の目論見は、これまで様々な批判を蒙ってきた。次節ではフッサールのデカルト主義を斥け、超越論的現象学の基礎づけ主義からの解放を目指すスタインボックの研究に焦点を当てる。

二 共に基づけ合う構造としての故郷世界と異郷世界

スタインボックは”Home and Beyond”序文の冒頭で、この著作が「社会的世界」における「同一性と差異(identity and difference)の問題」(HB,1)に取り組むものであることを明言し、この問題の解決を目指してフッサールの現象学を「超越論的」でありながら、同時に”non-foundational”な学へと展開することを宣言している(HB,3)。“foundation”の原語”Fundierung”は通常「基づけ」と訳されるが、以下に見るように、スタインボックはこれを「非-基礎づけ主義的」という意味合いで使用している。本来「基づけ」は『論理学研究』第三研究の中で、部分と部分あるいは部分と全体とのイデア的な論理学的関係を精査するために用いられたものである。この場合、当該の「対(Paar)」は、一方が他方に依存する「一方的(einseitig)」関係か、互いに依存し合う「相互的(gegenseitig)」関係、いずれかを形成する。しかしながら「基づけ」概念はその後『イデー・I』において「明証(Evidenz)」と結び付けられ、認識論的な問題設定の中で「一方的」な

「基礎づけ(Begründung)」概念へと変様したとされる(HB,10)。

意識による世界の「基礎づけ」というデカルト的思想は、「第五」の「デカルト的省察」において「自我」と「他我」の関係が静態的に分析される際、すなわち時間性を度外視した上で「他者」の妥当構造が問われる際に、そのまま反映されている。そこにおいて他者は、この「私自身の変様 *Modifikation meines Selbst*」(I,144)として、根源的自我による一方的な基礎づけを要するものと考えられている。この議論に対しては、むしろ自他は「等根源的」なものとして把握されるべきであるといった批判が向けられることもある。自我による他我の基礎づけを斥ける限りにおいて、スタインボックの見解はその種の批判と大いに重なり合うものである。つまり“non-foundational”な現象学において探求されるのは、一方的な「自己移入(*Einführung*)」によって捉えられた自他の関係ではなく、何らかの「共に-基づけ合う(*co-founding*)」ような関係性に他ならない。

しかし「第五省察」においても、その静態的な自己移入論は実際、「対化(*Paarung*)」と呼ばれる受動的現象の発生的究明を介して展開されている。すなわち「私の身体」と知覚された「物体」は「類似性」をもとに「対」を形成し、その間では相互的な「意味の移入 *Sinnesübertragung*」(I,142)が起こると考えられている。こうした時間発生的な諸分析の成果をわれわれは『省察』以降のテキストに多々、見出すことができる。それにもかかわらず、第一の「静態的現象学」はもとより、第二の「発生的現象学」にも留まらず、第三の方法として「世代発生的現象学」が提唱されるのは何故であろうか。この新たな方法が探求する「世代性」の次元はフッサール自身によっていかなる仕方で開拓されたのであろうか。

差し当たり「世代」とは、他の人間たちの誕生と生殖行為、そして彼らの死によって連続的に形成される、歴史全般にわたる人間的「生」の連鎖であると言うことができよう。従ってそれは、後期現象学の主題である「相互主観性」と「歴史性」の問題系の結節点に位置し、フッサールは30年代、折に触れてこれを思索の事柄とした。その際、超越論的分析の中心となるのは「繁殖(*Fortpflanzung*)」によって形成される諸「世代」を通じて、諸々の「意味」の統一が内容的には変様を蒙りつつも連続的に後世へと継承されるその「伝播(*Fortpflanzung*)」の過程、すなわち意味の「世代発生」の過程である。

しかし現象学が超越論的な自己省察である以上、「世代」形成の根幹にかかわるはずの「誕生と死」の現象からしてすでに極めて扱い難いものと言わざるを得ない。自己の「生」に対する遡及的な眼差しをどれほど「過去」へ遡らせようと、自己自身の「誕生」の場を視野におさめることは不可能であり、「死」もまた同様の困難を抱えている。スタインボックは発生的分析における「誕生と死」のような現象を、「与えられることができないものとして与えられる『現象』」という意味を込めて「限界現象(*limit-phenomena*)」と呼ぶ⁴。しかし彼によれば「誕生と死」が「所与性の限界」に位置するのは、あくまでもその際に適用される「発生的現象学」の方法

⁴ Anthony J. Steinbock, “Limit-Phenomena and the Liminality of Experience”, *Alter: Revue de Phénoménologie* No.6, 1998, p.275

論的限界に起因する。発生的現象学の持つ限界および世代発生的現象学は以下のように特徴付けられる。「個的な主観性、同時代の個々人の共時的領野、自我論において基礎づけられた相互主観性、こうしたものの生成に制限された発生的分析とは対照的に、世代発生的現象学が取り扱う諸現象は、まさにそもそもの始まりから、歴史的、地理的、文化的、相互主観的で規範的な諸現象である」(HB,178)と。つまり世代発生的現象学は個々人の「生」に制約されず、「そもそもの始まりから」してすでに「相互主観的」であるような地理的、歴史的現象としての「世代性」を自らの「事象そのもの」と見定める。そこでは「自我」と「他我」に代わり、「故郷世界」と「異郷世界」を根本現象の地位を占める。そして「基礎づけ主義」を免れた新たな現象学の可能性は、この故郷世界/異郷世界の枠組みを「共に-基づけ合う」構造として把握することによって探求される。しかし故郷と異郷はいかなる意味で「共に-基づけ合う」のか、次節ではこの問題とともに、世代発生的現象学が「超越論的」現象学の一方法として確立され得る理論的根拠をスタインボックの議論をもとに明らかにする。

三 スタインボックの世代発生的現象学

スタインボックは、世界全体を一挙に「括弧に置き入れ」、超越論的領界へと至るデカルト的な「前進的アプローチ」ではなく、あらかじめ与えられた「生活世界」に立脚してその先所与性へと発生的、遡及的に問いかける「後退的アプローチ」の方を重視する。言うまでもなくこれは『危機』における「生活世界」を経由する還元の道のりであるが、この「生活世界」論は疑念の余地なく明確な仕方では提示されていない。「生活世界」概念の孕む「二義性」を鋭く指摘したウルリッヒ・クレスグスは、客観的諸学に対して「地盤」的機能を果たす狭義の「生活世界」と、諸学の対象としての世界のみならずその他一切の「特殊世界(Sonderwelt)」を「全き具体相」のうちに包括する広義の概念を、フッサールにおける「世界」概念一般の二義性と結び付けた。すなわち広義の生活世界は、存在論的観点に基づく世界の「総体(Inbegriff)」的解釈に、他方、学の基礎としての生活世界は、世界を「地平」と捉える超越論的観点と結び付けられる。その意味において「フッサールにおける生活世界概念は…はじめから存在論的-超越論的な中間的概念(Zwitterbegriff)である」⁵と述べられる。

スタインボックもまた世界の「総体」的解釈を斥け、生活世界を超越論的観点から「領土(territory)」という概念によって捉える。彼は(1)原理的に直観可能なもの、(2)意味の基礎 foundation、(3)主観的-相対的な真理の領域、(4)知覚世界の本質構造(HB,87)といった様々な規定を、生活世界の「暫定的(provisional)概念」と見なす。これに対して生活世界の「超越論的概念」とされるのは「世界-地平(world-horizon)」並びに「大地-地盤(earth-ground)」という二つの概念である。これについてフッサール自身は次のように述べている。「世界は一つの存在者、一つの

⁵ Ulrich Claesges, “Zweideutigkeiten in Husserls Lebenswelt-Begriff”, in U. Claesges und K. Held (hrsg.), *Perspektiven transzendentalphänomenologischer Forschung*, Den Haag, 1972, S.97

対象のように存在するのではなく、唯一性(Einzigkeit)において、すなわちそれに対して複数が無意味であるような唯一性において存在する。あらゆる複数とそこから取り出される単数は、世界地平(Welthorizont)を前提とする」(VI,146)。あるいはまた「生活世界は…その世界において目覚めて生きているわれわれにとって、つねにすでにそこにあり(immer schon da)、われわれにとってあらかじめ存在し、理論的实践であれ理論以外の实践であれ、あらゆる実践のための『地盤(Boden)』となる」(VI,145)と。

事物的対象と原理的に異なり「つねにすでにそこにある」という仕方であらかじめ与えられている地平と地盤は、あらゆる事物経験を可能にする構成的条件として「超越論的」機能を果たす。スタインボックによればこの両者は「領土」としての生活世界の「二つの様相」を為すものである。それでは「領土」というこの超越論的解釈によって、いかなる生活世界論が示されているのであろうか。彼は次のように述べている。「領土は…他のものに対して無差別に並置された一つの生活世界ではあり得ない。それはわれわれの歴史的、文化的領土として限界づけられる。つまりそれは『故郷世界』として規範的に重要なものであり、異郷世界との共-構成的(co-constitutive)かつ共-世代発生的な(co-generative)関係のうちにある」(HB,122)と。つまり「領土」は、相対的に完結した諸々の生活世界の並列的共存を示唆するものではなく、むしろ「われわれ」の帰属する地理的、歴史的に「限界づけられた」一定の領界を、その向こう側に広がる「彼ら」の領界と「共に」指示するものである。こうして、われわれにとって馴染みのある通常の「故郷世界」と馴染みのない異質な「異郷世界」は、「限界」によって隔てられつつ「共に」存立する構造として明示される。

しかし両者は決して固定した「限界」によって画然と隔てられているわけではなく、その「限界」は経験の経過を通じて常に推移する。つまり、故郷はわれわれの帰属する家族、村、何らかの組織、民族等々、様々な規模と範囲で、そのつど新たに限界づけられて構成される。フッサールは、異他的なものとの遭遇とその理解を通して「周囲世界」が漸次的に拡大を遂げる過程を、「中心」から「環状に(ringförmig)」(XV,429)、あるいは「円錐状に(kegelringförmig)」(XV,438)広がる連続的拡大であると見なしたが、これに対して世代発生的現象学は、故郷と異郷を多層的で変動的な枠組みとして捉える。故郷/異郷は「共-世代発生的」なものとして、経験連関の中で常に新たに生成され続けるのである。

それではこの関係性はいかにして「共に-基づけ合う」ものとして経験され得るのであろうか。スタインボックは故郷/異郷構造に対する経験様式を、「共に」連関しながら「限界」の「向こう側」を暗黙のうちに構成する、「限界づける経験遂行(liminal experiencing)」として記述している。故郷/異郷を「限界づける経験」としては「我有化(appropriation)」と「侵犯(transgression)」という二つの様式が挙げられている。「我有化」とは故郷の文化的伝統を引き受ける意味構成の過程であり、この過程を通じて、異郷がわれわれにとっては「馴染みのない」、「異常なもの」として暗黙のうちに限界づけられつつ共に構成される。また「異郷との侵犯的遭遇」(HB,181)によって、突如「理解不可能なもの」として眼前に現出する「異常なもの」が「異郷」として構成される一方、こちら側の「正常性」そのものが際立たせられることによって、故郷的なものが

共に構成されるのである。世代発生的な「超越論的」分析は、この二種類の「限界づける経験遂行」が、意味の世代発生において「構成的な二重奏(duet)」(HB,179)として機能する場面を記述する。

以上のように故郷/異郷の「共-構成的」解釈は、確かに「一方的」な基礎づけ関係とは異なるものである。しかしまた、故郷/異郷は単純に「等-根源的」なものでもない。二項が「等-根源的」と言われる場合、その二つの根源が真に「等しく」根源的であるとするならば、両項は相互に転化可能なものでなければならぬだろう。しかし明らかにわれわれは「異常性」として際立たされる異郷の側に立って、これを「故郷」として経験することはできない。われわれはあくまでも故郷のうちに生きるものであり、それは故郷/異郷が「不可逆性(irreversibility)」あるいは或る種の「非対称性(Asymmetry)」を有するというを示している。世代発生的現象学はこの不可逆的で非対称的な枠組みの中で生ずる意味の連続的発生に入り込み、意味生成の超越論的分析を試みる。それではこの新たな分析方法によって、フッサールの超越論的現象学は「基礎づけ主義」から解放され得るのであろうか。また世代発生的現象学はフッサールの超越論的現象学に対してどのような関係にあるのであろうか。

四 超越論的現象学と世代発生的現象学

フッサールにとって「哲学」の意味を決するのはまさに「世界内的主観性(人間)から『超越論的主観性』への上昇」(V,140)以外の何ものでもなかった。「生活世界」はあくまでも「超越論的主観性」へと至る途上で経由する地点であり、晩年の彼は還元の予先を、今まさに機能しつつある主観性へと先鋭化し、「生き生きした現在」や「原-自我」、「先-自我」の問題系の解明に取り組んだ。しかし反省は本来的に事後的な確認に過ぎず、意識の機能現在をありのままの姿において捉えることを目指す究極的な還元は、現象学的意味での「形而上学」に道を開くものであった。「誕生と死」を例に挙げて確認したように、「世代」に関わる諸問題もまた、フッサールの発生的現象学においては「形而上学」的課題に他ならない。

これに対して、超越論的主観性への還元を斥けるスタインボックの試みは、地理的、歴史的、相互主観的な世代的発生の次元について、「生活世界」の地盤に立脚した上で積極的に語り得る視座を提供しようとするものであった。それは、世界や他我の基礎としての自我に代え、異郷世界という他なるものを常に「限界」の向こう側に予感する、われわれの故郷世界への注目を促した。故郷と異郷を「共に-基づけ合う」関係において把握する限り、自我という絶対的「基礎」に依拠することのない現象学的分析は確かに可能であり、フッサール自身、こうした分析を相当な程度において実際に遂行していた。しかし故郷/異郷がまさに世代発生的現象学の根本的な構造的枠組みとして取り出されるのだとすれば、この方法はやはり超越論的な「基礎づけ主義」を完全に免れることはできないのではないか。少なくともフッサールならば、今まさに故郷/異郷を「限界づける経験」を遂行している当の主観に対して「発生的現象学」の立場から遡及的な眼差しを差し向けるものと思われる。これが「背後遡行不可能性」の探求という意味

での「基礎づけ主義」として解されることは、はじめに述べた通りである。

また、世界経験のアプリオリな「構造」把握は、むしろ『イデー』期以来「静態的現象学」の分析課題ではなかったか。しかし、スタインボックもその著作を締め括る最終節では次のように述べている。「現象学の事象は世代発生的であり、従って絶えず生成しつつある事象なのであるから、世代発生的現象学は静態的から発生的、世代発生的へ、また世代発生的から発生的、静態的へ、等々、絶えず『前後に』に行き来することを要求するであろう」(HB,268)と。従って、「静態的現象学」ならびに「発生的現象学」というフッサール自身によって定式化された二つの分析方法は、決して昇りつめた後に捨て去られるべき「梯子」を意味するものではない。さらにスタインボックは、この永続的な前後運動としての現象学それ自体が、「世代性」という意味の生成発展過程に対する学問的な「参加(participation)」活動であるという点を強調する。つまり、現象学を営むということは単なる「記述学」の遂行に留まらず、むしろ「世代発生的過程のうちにある相互主観的で歴史的な構造の意味的発展に対する参加」(HB,268)を意味する。

フッサールにとって「究極的な基礎づけに基づく学」は、「究極的な自己責任」によって引き受けられるべき学問的課題を意味していた(V,139)。スタインボックも言うように、ヨーロッパ諸学の「危機」を訴え、その克服を目指すフッサールの学問的企図は、歴史的世界に対する哲学者としての倫理的な参加活動であった。絶えず変化のうちにある「世代性」を理論的根拠としてフッサールの「主観性」への還元を批判した世代発生的現象学が、現象学を営む省察者自身に対して「主観的」反省を促す側面があるとすれば、それは現象学の遂行をこうした責任ある「参加」として自覚すべきだという倫理的観点であろう。その限りにおいて、フッサールの「超越論的」哲学の内的「動機」は、世代発生的現象学によって積極的に継承されているとすることができる。

(まえだなおや 大学院博士後期課程)

[キーワード]

フッサール、スタインボック、世代性、世代発生的現象学、故郷/異郷